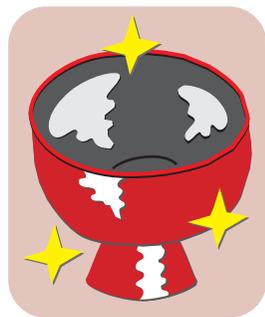


うるしの日

うるし工芸は日本が世界に誇れる伝統工芸技術の一つです。その歴史は古く、縄文時代にまでさかのぼることができます。うるしの製法と漆器の製造法が完成したのは平安時代になってからで、文徳天皇の第一皇子である惟喬親王が京都の法輪寺に参籠し、ご本尊の虚空菩薩から伝授されて日本国中に広めたと言い伝えられています。その満願の日が11月13日であったことから、日本漆工協会が毎年11月13日を「うるしの日」と定めています。

うるしは、ウルシの木の幹に傷をつけて、そこから分泌される樹液を採取し精製したものです。日本のうるしの主成分はウルシオールで、これが固化すると、うるし塗り独特の質感をもつ膜をつくります。一般的な塗料などのように水分や溶剤が蒸発して乾くのではなく、空気中の酸素と反応してウルシオールの分子同士が結合し（化学用語では「酸化重合」といいます）、高分子（*1）を形成することによって固化します。このとき、うるしの中に含まれているラッカーゼという酵素（*2）が、ウルシオールと酸素との反応を促す働きをします。この働きが活発になる環境は温度20～25℃前後、湿度80%前後であるため、一般的な乾燥と違って、むしろ湿気があった方が固化しやすいのです。なお、うるしはカブレを起こすことでも知られています。これはウルシオールによるアレルギー反応ですが、ウルシオールが完全に重合している漆器でかぶれることは通常ありません。まれに、作られたばかりの漆器で、重合し残ったウルシオールが蒸発してかぶれの原因となることがあります。購入する際に製造の時期を確認し、作られて間もない場合は、3～6ヵ月くらい経ってから使い始めるとよいでしょう。



漆器は高級品で取り扱いが難しいというイメージもあり、お正月などの特別なとき以外は押入れなどにしまい込みがちですが、汚れがこびりつかないうちにやさしく洗ってやわらかい布で拭くなど、いくつかの注意さえ守れば、それほど手入れに神経質になる必要はありません。普段の食卓でも活用して、日本の食文化とともに後世に伝え残したいものです。

*1 = 分子が鎖状や立体的な網目状に連なった分子量が1万以上の化合物。

*2 = 生物の体内で作られるタンパク質の一種で、消化・生成など生物が生きていくための反応を促すもの。
(平成18年11月)